小学校教育における動物飼育と生命尊重教育について — 動物を介した理科における生命尊重教育の指導 —

○桑原保光^A, 武 倫夫^B

KUWABARA Yasumitsu, TAKE Michio

群馬県獣医師会、群馬大学非常勤講師^A, 群馬県教育委員会高校教育課^B

【キーワード】 動物飼育, 生命尊重教育, 動物介在教育

1. はじめに

子どもたちの心痛い犯罪報道が多い昨今、動物病院に搬入される学校飼育動物の飼育環境は、多くの問題をわれわれ獣医師に感じさせる。

小学校での動物飼育体験は、子どもたちに生きものを愛護し生命を尊重する態度を育てるとともに、生命を理解させ、他人への愛情や共感を養うなどの効果と有用性を期待し実施されている。しかし、多くの小学校での動物飼育の現状を見ると、教育的に負の効果と思われることが目立ち、動物愛護法からしても、不適切な飼育が実施されていると言わざるを得ない。

そこで、理科教育の中で、動物を愛護し、生命を尊重する態度を育むための、動物飼育の在り方について提言する。

2. 学校教育の中で獣医師が果たすべき役割

学校での動物飼育は、飼育委員会などの活動の中で行われていることが多いが、飼育に携わる児童も、それを指導する教員も、飼育経験が不足しており、適切な飼育を行うことが難しい。このことにより、飼育環境が悪化し、不衛生な環境で飼育されている学校も少なくない。

このような状況の中、学校教育の中でのわれわれ獣医師の果たすべき使命は、動物の健康管理や飼育環境の改善等を行うとともに、子どもたちへの保健衛生指導、動物愛護指導を行うことである。また、動物飼育を食農・食育教育に発展させ、動物の尊い命をいただいで私たち人間が生きていられることを理解させる、生命尊重教育の指導も、獣医師にとって大切な役割であると考えている。

3. 教員養成課程及び教員に対する学校飼育動物関連知識・技術の普及

学校教育に獣医師が関わっていくとしても、直接子どもたちを指導するのは教員である。しかし、これまで大学の教員養成課程では、飼育動物に関する講義や実習は行われていなかった。そこで、平成12年度より、群馬大学において、小学校教員養成課程の学生に対し、動物飼育に関する講義や実習を行い、動物を適

切に飼育できる知識や技術を習得させるとともに、子どもたちが愛情をもって動物と「ふれあう」ことの重要性を理解させることに努めている。

また、群馬県総合教育センターなどの教員研修機関と連携し、実際に飼育動物に携わっている教員に対し、正しい飼育の方法や、飼育動物を活用した生活科や理科における指導方法に関する研修も実施している。

4. 学校における飼育動物のあるべき姿

小学校においては、子どもの動物観の特徴を考慮し、飼育動物の正しい接し方や衛生的な飼養管理について、学校全体の教育計画に位置づける必要がある。その中で、年齢、体力、地域環境に応じて動物種を選択し、飼育頭数や飼育年数を決定する。また、子どもたちが日常的に動物とふれあい、楽しい時間を共有できるような環境整備を行う。こうした飼育実践を基本とした上で、生活科及び理科の中で、動物愛護、生命尊重の心を育む教育を構築していく必要がある。

このことにより、子どもたちは動物の様子や動きを、科学的な視点から感じ取れるようになり、相手が喜んでいいのか、迷惑しているのかを判断し、それに対応した行動がとれるようになる。さらに、思いやりの気持ちを育み、豊かな感性の基礎基本を習得し、ひいては他教科への興味・関心に発展していくことも考えられる。

5. おわりに

動物愛護法では、「学校、福祉施設等における飼養及び保管について、管理者は動物の飼養及び保管が、獣医師等十分な知識と飼養経験を有する者の指導のもとに行われるように努めること」とある。また、今年の改正では、動物愛護の普及啓発推進のための教育活動が行われる場所を、「学校、地域、家庭等」と明記された。

このことを学校全体で十分に周知し、学校における飼育動物の適切な飼育と、教育活動での有効な活用を、獣医師とのこまやかな連携の中で推進していく必要がある。